

# 張廷済と清儀閣・太平寺

—— 現地調査からの考察 ——

川 合 尚 子

- 一、はじめに
- 二、張廷済の生涯と人間像について
- 一・張廷済の略伝と家族
- 二・学問・芸術と著作について
- 三、慈善事業などの社会的活躍
- 三、清儀閣・太平寺現地調査からの考察
- 一・太平寺との関わり
- 四、張廷済の一族
- 五、おわりに

張廷済（二七六八―一八四八）は、清代中期に活躍した書家で文物の収集家である。彼が編集した『清儀閣所藏古器物文』全十冊（商務印書館 一九二五年）からは、金石学が単なる学問の対象であるのみならず、愛情に満ち溢れた趣味の領域へと展開していったことが窺える。

今回は、このような彼が、どんな環境で暮らし、文物の研究や趣味・芸術に打ち込んだのかを詳しく知るために、清儀閣跡地と彼と深い関わりを持った太平寺に現地調査を行ってきた。そこで太平寺の住職 釈果蓮氏から賜った『太平寺史話』で明らかにされた張廷済の新たな一面を取り上げ、家族関係や交友、太平寺との関係について考察する。

## 一、はじめに

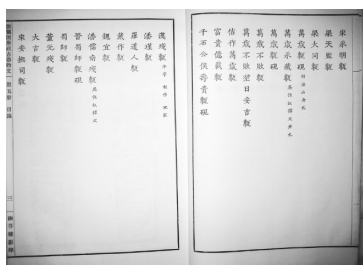
張廷済（一七六八—一八四八）は、清代中期に活躍した金石学者・書家で文物の収集家として有名である。彼は、幼少の頃から学問に励み郷試でトップの成績を修め解元となる。それから度々中央の会試に応じたが合格せず、ついに官途に志を絶ち、清儀閣を建てそこでひたすら書画家・詩文の創作、文物収集や研究など自分の趣味・芸術・学問の世界に打ち込んだ。また彼は、幅広く豊かな交友関係も築いている。翁方綱（一七三三—一八一八）、阮元（一七六四—一八四九）その門人達、金石文物が好きで收藏家として名を馳せ「金石僧」と称された達受（一七九一—一八五八）や地元の名士・学者に至るまでおり、よく清儀閣で友人や家族を招き、皆で文物の研究や題跋を書き、文物を題材に詩を詠んだりして過ごした。文物とそれに関わる人々との墨縁を大切にし、その収集・鑑賞・研究に励んだ成果をまとめた著書に張廷済編著『清儀閣所藏古器物文』全十冊（商務印書館 一九二五年）がある。

『清儀閣所藏古器物文』の「清儀閣」とは、彼の室名であり、「古器物文」は、古い文物に刻された文字のことである。彼が収集した文物は、時代を縦に切り、文物を横にして、整理・分類されていて、三代以後秦朝におよぶ青銅

器から清に至るまで極めて多種多様で、文字の刻された文物から直に拓本を取り、その余白に興の赴くまま跋を書いて、金石日記の趣を見せている。この編集方法も、当時としては珍しく、張廷済の著書を好む人達に読まれ大切に保管されていた。しかし、その原本は、一八五〇年に勃発した太平天国の乱の戦火に巻き込まれ清儀閣は破壊され、収蔵されていた文物諸共散逸してしまった。後、張廷済が亡くなり百年近く経とうとしたある日、上海の古書店で偶然この原本が徐曉霞（生卒不明）に見えられた。内容や順序も乱れていたが、褚德彝（一八七一—一九四二）により内容が分類・整理され、冊毎に目次を附し、復元影印された。そして、商務印書館編訳所長として活躍した張元済（一八六七—一九五九）により民国十四年（一九二五）に出版された。数奇な運命を辿った著書だが、奇跡の復活を果たし、再び人々の目に触れることができたのである。

この著書は、各冊の目録ごとに次のような構成になっている。

第一冊 商（殷）代／周代 爵・尊・卣・罍・觚・句兵・  
鍾・鼎・彝・敦・簋・鬲・盤  
第二冊 秦代／唐代 度・鼎・鑑・句兵・弩機・壺・洗・



『清儀閣所蔵古器物文』第五冊  
から目次と内容の一部分

- 第三冊 漢代～宋代  
第四冊 漢代～明代  
第五冊 漢～宋代  
第六冊 漢代  
第七冊 唐代  
第八冊 宋代～明代  
第九冊 宋代～清代

- 符・鉤・檢封・犁・范・造像佛座・  
金塗塔・銅龜・  
刀・泉・布・銅牌・  
銅鏡・玉版・孟・白瓷弥勒像・筆  
架・壺  
古甌  
瓦  
殘石・殘碑・經幢・墓志甌・詩碑  
銅權・銅牌・銅版・火藥匙・家廟  
銅爵・銅佛像・銅書瑞・書院祭  
器・鑪  
古印・私印

# 第十冊 宋代～清代

- 硯・硯櫃蓋・棊机・紫檀坐具・竹臂  
閣・篋・蓋・竹筆筒・墨・質庫・太  
平水龍」の刻字

宋代以来の金石学は、ややもすれば固い血のかよわない  
考証に偏りがちであったが、単なる学問の対象であるのみ  
ならず、愛情に満ち溢れた趣味の領域へと展開していつた  
ことが窺える。その意味でもこの著書は、張廷済の著書  
の中でも代表作といえる。

今回、この著書から彼は、どんな環境で暮らし、文物の  
研究や趣味・芸術に打ち込んだのかを詳しく知るために、  
清儀閣跡地とその隣にある張廷済とも深い関わりを持っ  
た太平寺に現地調査を行ってきた。本編では、そこで実際  
に分かったこと、太平寺の住職 釈果蓮氏から賜った『太  
平寺史話』（鮑翔麟編著 嘉興市南湖区政协文史委员会  
二〇〇八年九月未刊本）で明らかにされた張廷済の新た  
なる一面を取り上げ、家族関係や太平寺との関係について  
考察する。

## 二、張廷済の生涯と人間像について

### 一、張廷済の略伝と家族

さて、張廷済（二七六八—一八四八）は、どのような人物であったかを伝記史料をもとに新資料『太平寺史話』に掲載されている張廷済や今まで分からなかったその家族についての内容も盛り込み紹介しよう。

張廷済（二七六八—一八四八）初めの字は汝霖、後に説舟また未亭と称し、最後には、叔末に改めた。号は、竹田又の号は、海岳庵門下弟子、晩年は、眉寿老人・清儀老人と号した。浙江省嘉興鼎新篋里（現在は新篋鎮）の里正張鎮（二七三六—一八一〇）の次男。幼い頃は、海塩の呉懋政（生卒不明 乾隆の挙人）に親炙し学問に志した。前にも少し説明したが、嘉慶三年戊午（一七九八年）解元となるが、何度も会試が不合格となり、官職に就くことを断念する。張廷済は、この頃ちようど三十歳で、父



『清儀老人遺墨』  
より張廷済像

と共に本格的に里正の職を務め、文化事業・慈善事業・太平寺の護持など地域発展のために尽くすようになる。

張廷済の家系は代々、新篋里の名門望族で、新篋里の中心部の朝南街の太平寺のすぐ隣の西側約五百メートル四方の土地に渡り、それぞれ家を建てて共に生活をし、清儀閣もこの敷地内に建てられた。

彼の父張鎮が里正として村の徴税の責任を負い、張廷済・孫の張慶榮（一八二四—一八五四）・曾孫の張晋變（？—一八六〇）まで郷里の人々の信望も厚く、家も栄えていった。しかし、太平天国の乱の時代（一八五〇—一八六四）、一八六〇年に太平軍が村に侵入し、太平寺と張氏の屋敷・清儀閣や八輒精舎はすべて破壊され、張廷済の収集した文物も全て散逸してしまった。この日、曾孫の晋變と妹の均（生卒不明）が戦火に巻き込まれ亡くなってしまった。この後は、『太平寺史話』にも、張氏一族がどうなったのか、具体的なことは書かれていないが、『太平寺史話』の付録として、張廷済一族の略歴が掲載されている。そこには、張晋變の孫、張聿修（約一八七三—一八九四）と張廷済の弟張沉の玄孫張謀善（一九一三—一九八五）の二人のことが書かれている。張聿修は、病に罹り、二十二歳の若さで亡くなってしまいが、張謀善は、県の人民医院で医師として大成したとある。この後の家族



については、伝記はなく、現地調査でも子孫の方々とお会いする事は出来なかったが、張廷済の血筋は、脈々と現代まで受け継がれている。実際にその子孫が持っていた資料も盛り込まれ『太平寺史話』が編集された。現地調査により、華やかに栄えた張氏一族が戦争により築き上げてきたものが全て失われたことを知り、悲しく思っていたが、張廷済が生きた当時の様子を知る資料が次々と発見され、子孫の方々が今も元気に暮らしていることが分かり大変よろこばしく思う。

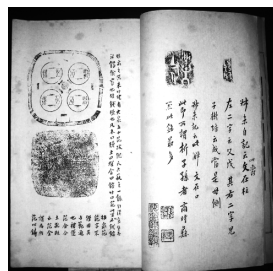
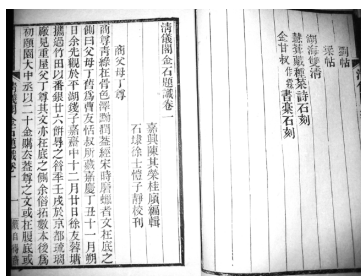
## 二・学問・芸術と著作について

張廷済は、前に述べたように、官職を諦めてから、自分の好きな学問や芸術を楽しむ、その成果を著作として世に残している。すでに文物の収集家として中国全土に知られている。また、その収集と研究で培われた殷・周の金石・碑など金石書画の真偽を見抜く鋭い鑑識眼の持ち主としても名を馳せていた。その張廷済が生涯かけて取り組んだ学問といえば金石学であろう。文物収集や研究することが彼の最大の楽しみであり、生き甲斐にもなっていた。彼が金石学を学び、文物収集に勤しむようになったきっかけは、家庭環境にあった。伝記資料を辿ると張廷済の父張鎮（二七三六—一八一〇）の代から翁方綱（一七三三

—一八一八）・阮元（一七六四—一八四九）と交流し、金石学を学び、文物収集に地元を中心に行うようになった。そして自然と張廷済は、兄の張沆（一七六四—一八〇九）・弟の張沅（一七七〇—一八四七）・従兄の張灝（一七六一—一八一三）・姐夫の徐澍（一七五七—一八三一）等と共に、文物収集や研究をするようになった。やがて学問で続けていた文物収集と研究が楽しく趣味となり、ほぼ毎日の日課となった。その氣風が家族中に伝わり、家族皆が文物収集と研究を趣味とするようになった。それから、張廷済の子の張慶棠（一八二四—一八五四）・甥の張兆楠（一七八五—一八三八）・張邦樞（一七八五—一八二三）・張上林（生卒不明）・同じく甥で徐澍の子の徐同柏（一七七五—一八六〇）・孫の張晋燮（？—一八六〇）・張兆楠の子の張日烜（一八〇九—一八三八）にも金石学を教え、文物収集も同行した。中でも徐同柏は、張廷済に代わって文物の考証を行い、張廷済が文物について跋を書く時は、合わせて考証した内容を記した。その様子は、特に『清儀閣所藏古器物文』第一冊中で窺える。また、張廷済が収集した古印を徐同柏が考証をし、時代や種類ごとに整理・分類し、跋を書いた著書『徐籀莊手寫清儀閣古印考釋』（徐同柏著 道光一八年戊戌（一八三八年）一月一七日刊 出版地不明 風雨樓秘笈 留真之九として

鄧実（一八七七—一九五二）が出版）がある。これには、印譜は無く、印名と跋のみだが、徐同柏の子の徐士燕（一八一九—一八七二）も余白に自ら考証した跋を書いている。徐澍から徐士燕まで三代に渡って、張廷済との家族・研鑽する同士として強い繋がりが窺える。

他に張廷済の金石関係の題跋の著書として『清儀閣金石題識』（張廷済著 陳其榮編 徐士愷校刊 一八九四年発行地不明）この著は、既に『石刻資料新編』第四輯（七）（二〇〇六年 新文豊出版）に収録されている。その原本に近い状態で影印されたものが中国杭州の浙江図書館古籍部に収蔵されていた。内容は、清儀閣に収蔵されている商（殷）から清までの青銅器・鉄器・石刻の拓本・法

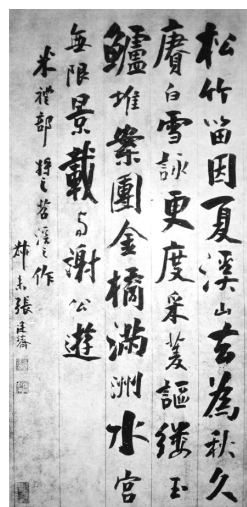


『清儀閣金石題識』と『清儀閣金石文字拓編』の一部分

帖など時代順に分類されて、それぞれ考証した跋文が収録されている。この著で、清儀閣にあった文物の数々が具体的に分かる。

また、『清儀閣所藏古器物文』によく似た編集方法で清儀閣の収蔵物を考証した著書がある。『清儀閣金石文字拓編』（翁方綱著 発行年不明 有正書局）である。これも中国杭州の浙江図書館古籍部に収蔵されていたもので、何より珍しいのは、収録されている文物の跋すべては、翁方綱自ら書き、題字は、阮元が書き、刻字になっていることである。張廷済の文物の跋は、ほとんどが彼自ら書いたもので、余白か別のページに家族や友人等の跋が書かれているが、この著書にはそれが無い。しかし、張廷済と阮元・翁方綱との深い交流が分かる著書である。

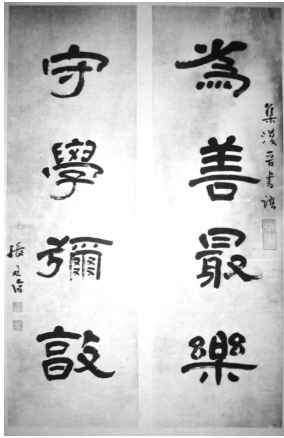
それから『清儀閣雜詠』（張廷済編 一八三九年 清儀閣刻 現在は、『石刻資料新編』第四輯（九）（二〇〇六



『清儀閣老人遺墨』の一部分①

年 新文豊出版)に収録されている)も金石著書として独特な内容になっている。清儀閣の間取りについてから始まり、收藏品の跋(張廷済本人、張兆楠・張上林・徐同柏などの家族のもの、翁方綱など交友のある人のもの)・文物を題材にしての張廷済自ら詠んだ詩・拓本や書の注釈など様々な内容の文章が書かれている。これも、張廷済の金石学・交友を知る重要な著書である。

次に、張廷済の芸術についてであるが、その作品として取り上げられるのは、書作品であろう。伝記では、張廷済は、書に巧みであったと称されているが、実際に、彼の書作品を見ることが出来なかった。しかし、中国杭州の浙江図書館古籍部に『清儀老人遺墨』(一九一八年 発行所不明)が収蔵されていた。彼の死後、彼を偲び褚德彝、呉昌碩(二八四四—一九二七)等により張廷済の遺墨が



『清儀老人遺墨』の一部分②

集められ出版された。

張廷済の書法については、伝記資料から分かる。初め鍾繇と王羲之を学び、五十歳頃には、顔真卿・歐陽詢・晩年には、米芾の書法を学び、それにちなみ「海岳庵門下弟子」とした。この「海岳庵」というのは、米芾のことである。張廷済は、米芾の書等の芸術や人物を尊敬し、私淑したのである。毎日、日記のように跋を書き、それが、書法へと発展し、書簡の気風を感じる肉太で温かみのある書になっている。

また、画にも優れていたという。晩年には、特に梅の花を写して、楽しんでいたようである。だが、その画は、現在まだ確認できていない。今後の調査対象である。

また、晩年には、眉毛が長かったようで、伝記には、「眉長徑寸(眉長きこと徑寸)」とあり、約三・〇センチはあったとされる。この特徴から、阮元と一緒に、「眉寿図漱石」を作ったようである。晩年の号、眉寿老人と呼んだことも納得できる。しかし、この「眉寿図漱石」も現在では、確認できていない。

そして、書画には、欠かせないものとして、印がある。張廷済は、自ら印を刻し、それを友人・知人に贈ったり、古印の収集にも熱心に取り組んだ。『清儀閣所藏古器物文』第九冊には、清儀閣に収蔵されている印が印譜にされ跋を

添えられて編集されている。また、清儀閣が戦火により崩壊した後、散逸してしまった印が再び発見され、印譜として編集され、世の人々に目にしてもらえなくなった著書に、『清儀閣印存』（二九一四年四月 神州国光社）・『清儀閣藏名人遺印』（二九一四年五月 神州国光社）がある。この二種の著書に収録されている印のうち、『清儀閣所藏古器物文』第九冊に載る印もいくつかある。しかし大半が載っていないもので、『清儀閣所藏古器物文』編集以後に集められた印の可能性もある。側款をみると、張上林や張廷済の妻沈氏（一七六七—一八一六）の刻したものが見られた。ここからも、張廷済の古印収集や印芸術、印をめぐる墨縁も知ることができる。

張廷済の学問・芸術などは現存する著書の中から知ることが出来る。今回取り上げた『清儀閣所藏古器物文』をはじめ、詩集・日記・他の題跋など様々なものがある。今では、清儀閣崩壊以後、張廷済の著書も散逸したものが多く、書名だけが残り、現存していないものもあり、まだ確認できていない著書を伝記資料などから分かる範囲のものをあげておく。今後とも、調査し現存するものがあれば、入手し研究していきたい。

『叔未金石文字』『清儀閣題跋』『金石奇縁』『墨林清話』『清儀閣印譜』『清儀閣詩鈔』『眉寿堂集』『古印綴存』

『清儀閣集古款識』『竹里畫者詩』『清儀閣筆記』など。

### 三、慈善事業などの社会的活躍

前に少し述べたが、『太平寺史話』により、学問・芸術・趣味の活動だけに人生を注いだだけではない、張廷済の新たな一面を知ることができた。それは、官職を諦めてから、父と従兄の張灝と共に新篁里の発展のため、里正の仕事に努め、慈善事業、文化活動に取り組み、村民の尊敬を集めたことである。

新篁里は、河に囲まれ、土地が低く、降雨量が多いため、水害に遭いやすかった。そのため、洪水によって農作物が被害を受け、大不作で度々食料難になった。村人達を飢餓から救うため張廷済と父・従兄の灝の3人は、手分



清儀閣跡地 正面①



けて、近隣の村の名家に書状を送って、食料を村人に支給してもらえよう頼んだり、社庫（穀物庫）を造って飢饉時に備えた。そして、太平寺内に共同墓地を建設し、貧民の救済、河川整備と水上交通の開拓、橋の整備などの慈善事業を行った。太平寺の僧とも親交があり、寺を護持し、乾隆・嘉慶・道光の寺僧、維輝・楞山・本覺・湛宗・広聞等と親交を結び、『太平寺同戒録序』の文章や『寄題沸雪軒』・『太平橋』・『金和尚』・『僧曉峰』・『呂祖壇驗方』等の詩を作った。また、太平寺内に地元の文人や科挙の受験生が勉強するための施設「文昌社」を復興させたり、文字や紙を人類の文明の神と崇め、地元古紙を回収し、寺で焚き、文字と紙を供養する組織「惜字会」を復興させたり、僧のために戒律に則り適切な修業場の整備をしたり、『心経』一卷を自ら書き、それを鑄込んだ大鐘を太平寺に寄贈したり、海塩の朱葵之（朱丙寿の祖父）と「続小瀛洲詩社」を結んだ。太平寺を拠点に、村の教育や学術の振興、寺の発展のためにも力を尽くした。

### 三、清儀閣・太平寺現地調査からの考察

清儀閣は、張廷済が官途の志を絶った後、自ら建てた自宅である。清儀閣の隣には、建物自体は無くなったが、ここにあったことが確認できる、八瓢精舎という、磚や

瓦を収蔵・鑑賞・研究する建物があった。大変美しい建物だったようで、太平寺の正面に流れる水路「丁溪」・後方の水路の「甲漣」・太平街等の美しい風景と共に、古代新篋里の十景の一つにとされている。清儀閣は、張廷済の孫・張晋燮に受け継がれ、大切にされてきた。しかし、太平天国の乱が勃発後、咸豊庚申（十年 一八六〇年）七月十七日、太平軍が新篋里に攻め入り、激しい戦闘のために、太平寺と清儀閣と八瓢精舎は、尽く破壊されてしまった。収蔵されて

いた文物は、ほとんど散逸してしまつた。また、張晋燮と妹の均は、この戦乱に巻き込まれて、亡くなつてしまつた。張晋燮の没後、太平寺で代々行ってきた、「文昌社」の文化的な活動は再開されることはなかつたという。



清儀閣跡地 正面②

め入ってきた。民国二十八年（一九三九年）旧暦七月の頃から、翌年の旧暦十月初め新簗里に日本軍が攻めてきて、太平寺と清儀閣を破壊してしまった。清儀閣は、二度の戦災に遭い、立て直されてきたが、だんだんと規模が小さくなり、現在は、小さな庭と二棟の建物を残すのみとなっている。誠に、惜しいことだ。二〇〇六年頃までは、張廷済の子孫がここで暮らしていたようである。しかし、太平寺の拡張工事の為、清儀閣を太平寺に寄贈した。その後は、



清儀閣跡地 正面③

太平天国の乱の後、太平寺と共に、清儀閣の跡地に、清儀閣が復元され、張廷済の子孫達が暮らしていたようである。しかし、後に日中戦争が勃発し、民国二十七年から二十九年（一九三八年―一九四〇年）の間、海塩県から新簗里まで、日本軍が攻

家族は別々に暮らすことになり、今では、太平寺ともあまり関わっていないようである。ここで、現在の清儀閣の様子を見ていこう。現地では、太平寺の住職積果蓮氏が案内をして下さった。清儀閣は、太平寺の敷地内にある、



清儀閣跡地 清儀閣内部①



清儀閣跡地 工事中の跡地





せいぎかく  
清儀閣跡地 内部②



せいぎかく  
清儀閣跡地 当時のままの壁

本殿と塀を隔ててすぐ西隣にある。  
今は、人が住んでいないので、物置になっている。正面の庭は、張廷済が住んでいた頃の往年の姿を残している。  
建物は、レンガ造りで、白く塗装され、屋根は瓦で葺かれていた。窓は、ガラス



せいぎかく  
清儀閣跡地 正面の庭①



せいぎかく  
清儀閣跡地 正面の庭②当時の庭石

窓で、清の民国頃の古民家の建築様式のようなのである。  
清儀閣は、さらに大きく、写真（工事中の跡地）のように広い土地に建てられていたという。今では、その地を囲む当時の塀を残すのみである。私が訪れた時には、太平寺の拡張工事のために更地になっていて、新しい寺院の土台が出来上がろうとしていた。当時の塀の遺構を見ると、広い土地に清儀閣が建っていたことが分かる。また、当時の面影を残すものとしては、小さな庭の形の面白い岩と石臼の形の岩があり、拡張工事の最中に、地面から掘り起こされたものらしい。清儀閣の庭の遺構といわれている。  
今では、庭の片隅に無造作に積まれているだけだが、当時の清儀閣が建っていた頃には、庭に美しく並べられて、

彩ったことであろう。

内部は、建築資材や荷物で埋まっていた。物置場として使われているようだった。正面の入り口の軒下では、白い鳩の巣箱が設置され、鳩が飼われていた。

室内を見ると、レンガで固め、天井は、梁と桁が渡され、壁は白い漆喰が塗られ、床は、コンクリートで舗装されていた。当時の収蔵品等は、残念ながら無かった。

しかし、張廷済の子孫の方々がここで生活されていたことが分かると、ひとしお興味深く感じた。山積みの建築資材の中に、この家で使われていたという椅子が二脚あった。いずれも左の肘が無くなっていたが、中国伝統の「南官房椅子」で、長年に渡って、使われていたものであろう。



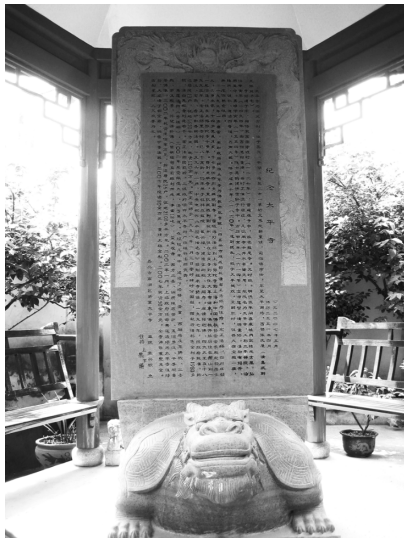
清儀閣跡地 当時の椅子



清儀閣跡地 正面④鳩小屋あり

次は、清儀閣の西隣の建物に移ると、正面の建物と同じ構造であった。資材で埋まり、中を伺うことはできなかった。ここも、また、この建物の正面にも、三棟目の建物があったが、ここも、資材保管庫になっていた。構造は、他の建物と同じだが、規模は、小さく、最初から物置部屋として使われていたようである。

張廷済の自ら残した著録には、彼と親しくしていた歴史に名を残した名士、地元住民などの人物が多く登場する。清儀閣は、そんな人々の交歓の場であった。太平天国の乱と日中戦争で壊されてしまったが、そのたびに建て直され、現在まで一部であるが残った。張廷済の子孫の方々が暮



清儀閣跡地 太平寺碑

らしていた頃までは、かつての清儀閣のように地元の人々が集う場所であったようだ。

### 一・太平寺との関わり

張廷済の社会活動で最も注目するべきことは、太平寺との関わりと村の発展のための慈善事業である。彼は、順治初め（一六四四年）から始まった、「文昌社」の村民と科擧の受験生の為の教育活動に携わっていた。新篁里の仏教信仰の中心であり、村の心の支えともなっていた。太平寺のすぐ近隣に家を構えて暮らしてきた張廷済の一族は、代々寺と密接に関わり、寺の住職と共に寺を守り、仏教にも帰依してきた。一八三一年には、当時の太平寺の住職の



清儀閣跡地 陸公之墓



清儀閣跡地 山門の扁額

釈戒能が寺に大鐘を作った。その時、張廷済は、自ら書いた『心経』一編を大鐘に鑄込んだりと、仏教の信仰心も窺える。悲しいことに、この大鐘も太平天国の乱の戦火でより壊されてしまい、今は存在しない。

また、張廷済の父張鎮は、太平寺の行っていた様々な事業に協力し、自ら指揮を取り、張廷済と共に、村の発展の為に尽力していた。こうして太平寺は、村を治める為の活動の中心となった。清儀閣に多くの名士文人が集まっていたのは、そこが、太平寺のすぐ隣に位置していたことで、「文昌社」や清儀閣は、勉学研鑽の中心となった。

この他、張廷済が太平寺と関わっていた資料がいくつもある。まずは、太平寺の山門に掲げられている「太平寺」の扁額である。二〇〇八年張初橋氏と徐小英氏の阿氏が、『清儀老人遺墨』から集字し、創られた。清儀閣の跡地の片隅に「陸公之墓」（初め、明洪武二年己酉（一三六九）立・丙戌年（一四〇六）春重立）という墓標が建っている。陸公とは、陸慶春のことで、元代に廃した太平寺を復興させた人物である。張廷済は、陸慶春の為に尊敬の思いをこめて、太平寺に廟を建立した。そして、廟の門には、張廷済作の対聯がかけられていた。しかし、太平天国の乱にその廟も壊され新たに、現在の墓標が建立された。また、「記念太平寺」という記念碑があり、清儀

閣についても記されている。

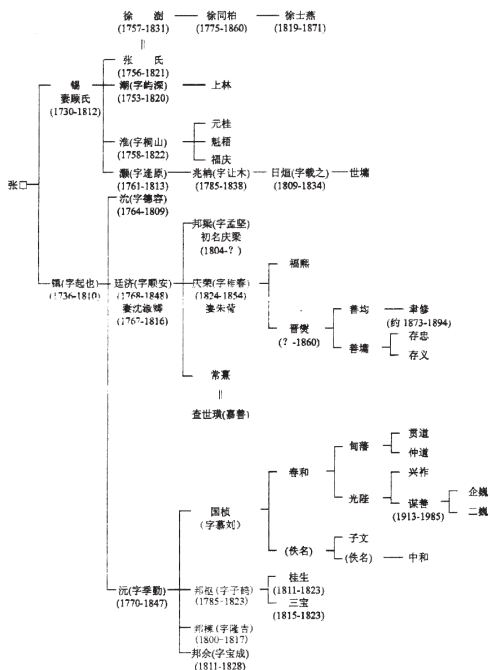
#### 四、張廷済の一族

張廷済の一族の伝記資料としては、『太平寺史話』が重要で、張廷済の家系図「嘉興新塋里張氏世系表」と略伝が付録にあった。今まで張廷済の家族関係については、伝記史料や『清儀閣所蔵古器物文』中に家族のことや文物の収集と研究を共に行ったことなどの記述があるので、そ

から推測できたが十分ではなかった。しかし、これにより張廷済の家族関係が明らかとなり『清儀閣所蔵古器物文』中にもある、家族との文物収集・研究についてはつきりと理解できた。張廷済が文物収集・研究に夢中になり、趣味となっていたのは、家族ぐるみで文物収集・研究に取り組んでいたから自然と張廷済もその中に溶け込んでいった。特に、『清儀閣所蔵古器物文』第五冊には、家族のことを述べた文章が多く、地元や旅行先で古輒収集を行う様子が度々書かれていて家族で楽しみなから文物研究をしていたことが分かり、張廷済にとっても古輒研究が特に思い入れのある分野だと分かる。ここで、『太平寺史話』と家族の記述が多い『清儀閣所蔵古器物文』第五冊から、張廷済と特に関わった主な人物を取り上げ紹介する。

附件：

#### 嘉興新塋里張氏世系表(附徐氏)



『太平寺史話』付録「嘉興新塋里張氏世系表」

張沈(二七六四—一八〇九)字は徳容、号は中緩、張廷済の兄。国学生。書画を嗜み尤も篆刻に工みであった。著作には、『淳雅堂石印譜』がある。張廷済、張燕昌、徐澍、徐同柏らと共に、古輒の収集と研究に励んだ。張廷済等がよく古輒収集に出かけた、海塩の海には、秦代の故城が



沈んでいて、干潮の時、その故城が現れる所がある。地元  
の漁師達は、この現象を「海現」と呼んでいた。その時、  
様々な古甕の収集ができた。このことを張沈は、よく張  
廷済に話し、共に、「海現」のある海岸に出かけ、地元  
の漁師達にも手伝ってもらい、古甕の収集を楽しんだ。『清  
儀閣所蔵古器物文』第五冊には、張沈は、既に亡くなっ  
ているとあり、張廷済は、張沈と収集した古甕を眺めて、  
張沈と古甕の収集した時のことを懐かしんでいる。

張灝（二七六一—一八一三）字は逢源、号は逢園又は  
叔閑。張廷済の従兄。母の顧氏に孝行し、才気に溢れ、  
張廷済と彼の父張鎮と共に、新篋里の里正の公務に尽力  
した。金石を好み、張廷済と共に、文物の収集と嘉興内  
の石刻・瘞鶴銘の採拓を楽しんだ。張灝も、よく海塩の  
海岸や古い城壁のあるところに出かけ、古甕の収集に励ん  
だ。海塩内で古甕が手に入る場所に詳しく、鑑識眼も鋭か  
った。

張沅（二七七〇—一八四七）字は楚白、号は季勤又は  
季木。張廷済の弟。竹の画が工みで、多く残した。張廷  
済と、古甕の収集にいそしみ、翁方綱や翁樹培とも交流が  
密で、古甕に銘を書いてもらい、刻したものもある。

張上林（生卒不詳）字は心石、号は又超、又は古村。  
吟詠を楽しみ、竹画に工みで、金石篆刻を好んだ。張廷

済の侄。古甕の収集や研究に熱心で、八磚精舎によく出  
入りし、張廷済と古甕談議に花を咲かせた。

張慶栄（一八二四—一八五四）字は大豫、号は稚春。  
張廷済の次男。道光二十六年（一八四六）の解元。著作  
には、『稻香楼詩稿』がある。父の影響を受け、金石学を  
嗜み、古甕の収集と研究に勤しんだ。

張晋燮（?—一八六〇）字は励柏、号は理伯。張慶栄  
の次子。張廷済の孫。向学心に篤く、祖父の張廷済を尊  
敬し、駕湖書院に通い、研鑽した。金石を好み、張廷済  
に付いて、古甕の考証に励んだ。しかし、太平天国の乱の  
戦火に巻き込まれ、太平寺諸共清儀閣のある張氏家も破壊  
され、故郷を追われるという受難に遭う。

張邦枢（二七八五—一八二三）字は中之、号は子鶴、  
又は行四、張廷済の侄。十九歳で嘉興県の学官弟子・廩  
生となった。四書文を深く理解し、詩格は雄健、詞句は清  
麗、駢儷文を得意とした。著作には、『正味齋集稿』（未  
完本）と詩文賦詞若干篇がある。『清儀閣所蔵古器物文』  
第五冊（古甕）中には、郷試のお祝いに、張廷済から、  
「晋成帝咸康六年甕」を贈られている。彼も、古甕収集  
と研究に篤かった。

徐澍（二七五七—一八三一）字は瀛州、号は溪南老屋。  
張廷済の姐の夫。子は徐同柏。学生。詩歌音韵に優れて

いた。著には、『溪南老屋詩』がある。張灝、張沈、張廷濟、実子の徐同柏等と共に海塩内の古輒収集によく出掛け、彼らと共に、文物の考証に勤しんだ。

徐同柏（一七七五—一八六〇）字は寿蔵、春甫、号は籀庄又は少籀。原名は、大椿。張廷濟の甥。張廷濟に指受され、六書篆籀を精研し、文物の文字・時代等の考証を得意とし、張廷濟は、文物の考証を、主に彼に任せていた。張廷濟は、文物の代金を徐同柏と出し合って、一緒に購入したという記事がある。また、文物を求めて様々な



らんしゅうえん 櫓秀園入り口



らんしゅうえん 清儀閣跡地発掘の残碑の廊下



らんしゅうえん 清儀閣跡地発掘の残碑一部分

地域へ出掛けるときは、徐同柏も連れて行って購入したという記事もある。張廷濟は、徐同柏をとてても可愛がり、徐同柏も張廷濟を尊敬し、学問であり趣味の金石学や古器物の収集、考証から生活の全てを共有していた。また、篆刻をよくし、張廷濟の印は彼が刻したものが多い。張燕昌らとも交流し、残碑零碼・井欄橋柱・瓦当壘甗等の考証に取り組んだ。著作には、『從古堂款識積文』等がある。

同じ趣味・学問等何から何まで共有できる家族関係が、



張廷済の文物研究と趣味・芸術を楽しむ生活を豊かなものにした。

## 五、おわりに

今回の現地調査で、今まであまり公には紹介されていなかった張廷済と清儀閣・太平寺の関係、家族関係が明らかになり、張廷済は、文物収集や研究・芸術・趣味に打ち込み、その成果を著作や作品に遺すだけでなく、地域の里正として人々のために社会貢献していたことが分かり、彼の興味関心の広さ、なんでもこなすことの出来る優れた能力を知った。また、この現地調査で嘉興市にある檀秀園に清儀閣跡地から出土された、清儀閣所蔵の残碑が展示されていることが分かり訪ねた。そこには、張廷済の趣味が窺える残碑の数々を見ることができた。今後、この調査から得た残碑の資料を詳しく調べ、清儀閣で張廷済が行っていた独自の文物研究や芸術・趣味の新たな一面を明らかにしたい。

## 参考文献

### 《根本資料》

『清儀閣所蔵古器物文』十冊 清・張廷済撰

民国十四年（一九二五）上海商務印書館

桐郷徐氏愛日館藏本景印

### 《伝記資料》

『清代画史増編』三十七卷・補録一卷 盛薰輯

民国十六年（一九二七）有正書局

『清画家詩史』二十卷 李潛之輯

民国十九年（一九三〇）寧津李氏刊本

『甌鉢羅室書画過目考』四卷附一卷 清・李玉棻撰

光緒二十三年（一八九七）男元振刊本

『清代名人尺牘集小伝』二十四卷 清・呉修撰 発行年場所不明

『清代僕学大師列伝』二十五卷叙伝一卷 支偉成撰

民国十四年（一九二五）上海泰東図書局排印十七年再版本

『金石学家列伝』発行年場所不明

『清代学者像伝』第一集四冊 葉恭綽輯

民国十九年（一九三〇）上海商務印書館景印本

『清儒学案小伝』二百八卷 徐世昌撰

民国二十八年（一九三九）北京刊本

『国朝書人輯略』十一卷首一卷 清・震鈞撰

光緒三十四年（一九〇八）金陵刊本

『書林藻鑑』十二卷索引一卷 馬宗霍撰

民国二十五年（一九三六）上海商務印書館

『皇清書史』三十二卷首一卷末一卷附録一卷附皇清書人別号録

一卷 清・李放撰 号録・葉眉撰

『清代七百名人伝』六巻補編一卷附録五巻 蔡冠洛撰

『清史稿』中華書局本

『清史列伝』八十巻 清・闕名輯

民国十七年（一九二八）上海中華書局

『新編金石字録』松丸道雄編

昭和五十一年（一九七六）九月発行 汲古書院

# 《その他の資料》

『徐摛莊手写清儀閣古印考釋』徐同柏著

道光十八年戊戌（一八三八年）一月十七日刊とする。）

『清儀閣藏名人遺印』徐同柏主題・褚德彝著

甲寅（咸豐四年 一八五四年）閏五月 神州国光社

『清儀閣印存』褚德彝編一九一四年四月 神州国光社

『張元濟年譜』張樹年主編 柳和城、張人鳳、陳夢熊編著

一九九一年十二月第一版・北京第一次刷 商務印書館

『太平寺史話』上下巻 鮑翔麟編 嘉興市南湖區政協文史委員

会 二〇〇八年九月（未刊本）

『清儀閣金石題識』張廷濟著陳其榮編徐士愷校刊

一八九四年 発行地不明）

『清儀閣金石文字拓編』翁方綱著 発行年不明 有正書局

『清儀閣老人遺墨』張廷濟書 一九一八年 天真精製翻印

『石刻資料新編』第四輯（七）（九）二〇〇六年 新文豊出版

『清儀閣雜詠』張廷濟編 一八三九年 清儀閣刻